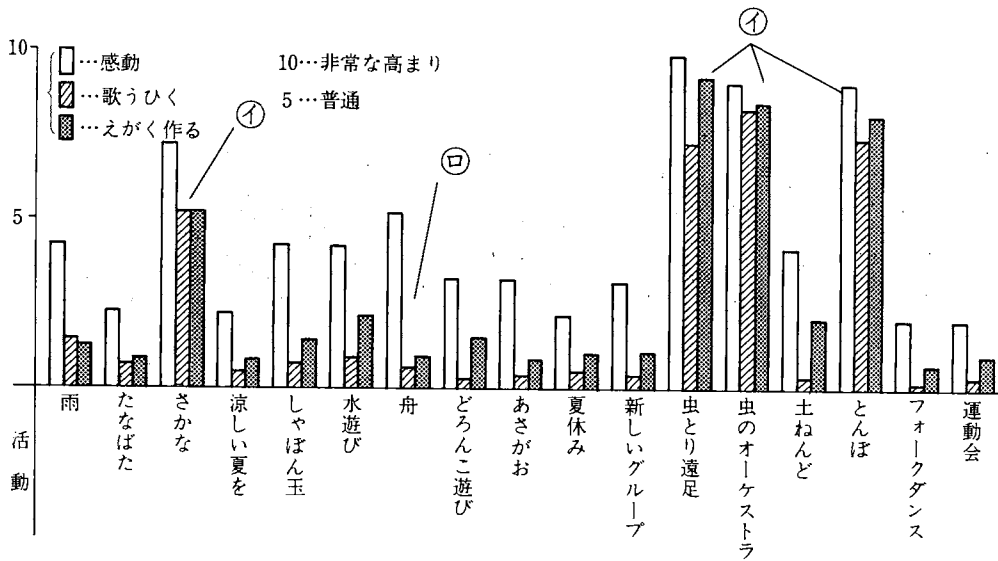


### (3) 観察児のプロフィールからその子へのねがいをもつ

任田 有孝

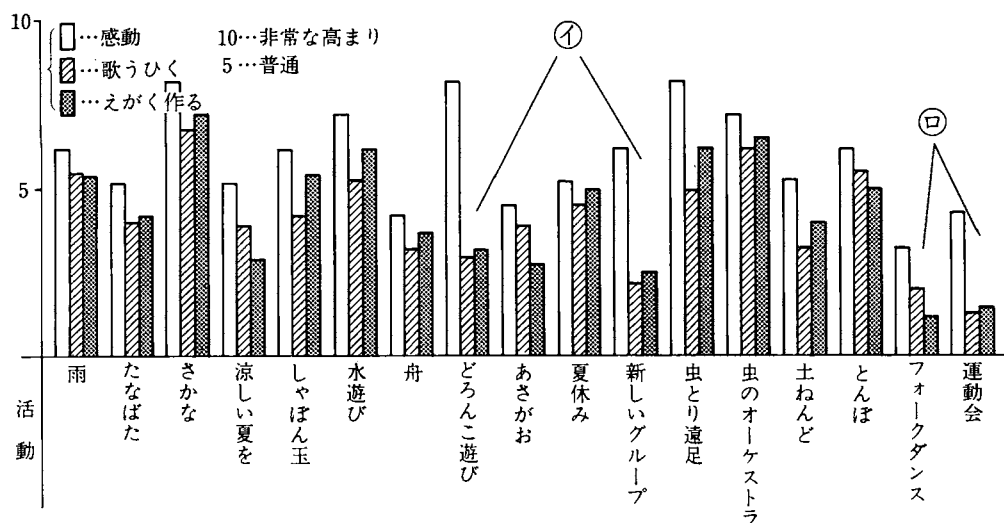


#### 有孝へのねがい

●一学期の有孝を見ていると、多方面に感動を示すが、口ばかりの感動というか表現の持続性が短かいというか、感動が表現として表われない場合が多くあった。つまり浅く広い感動を示す幼児である。②の舟は、典型的な例で、絵本で舟に感動を示したが、いざ舟づくりをはじめると、ちょっとしたつまづきですぐ挫折して、いろいろな材料を利用した舟づくりにどの子も夢中になっている時にはもう部屋の中をふらふら歩きまわり違うものに気持ち移ってしまっていて、いろいろ声をかけたが効果はなかった。

●そのようなことが多い有孝だが、題材さかなの時は、活動が持続していた。夏休み明け、虫とりにいく虫かごを作った時は、いままでの有孝とは全く違った感じで牛乳パックで虫のアパートを作りそれを虫とり遠足にもっていくと大張り切り、以前だったら投げ出してしまいそうな場面でも黙々と製作し、朝でも一人自由画帳に図鑑を横において歌を口ずさみ虫を描いていた。またリズム打ちまねっこから「これはこおろぎのとおりズム……」と楽しんだ。この変化は有孝の興味の対象と感動とが一致したためと思われる。有孝は生物特に昆虫にとっても興味があるようだ。それで①のようなグラフとなった。感動をもったから興味をもつというのは自然だが、有孝のように以前から何かの形で親しみをもっていたものに、より新たに感動を抱いた場合、スムーズに表現のせかいに溶け込むことができる。

●有孝は感動はするがそれが歌うひくの表現やえがく作るの表現に結びつきにくい子である。しかしいろいろな活動を見ていると、えがく作るの表現で意欲がある場合、歌うひくの表現もそれに伴って、伸びている。特に作ることを主とした表現で自信をつけさせる配慮が効果を高めるように思う。



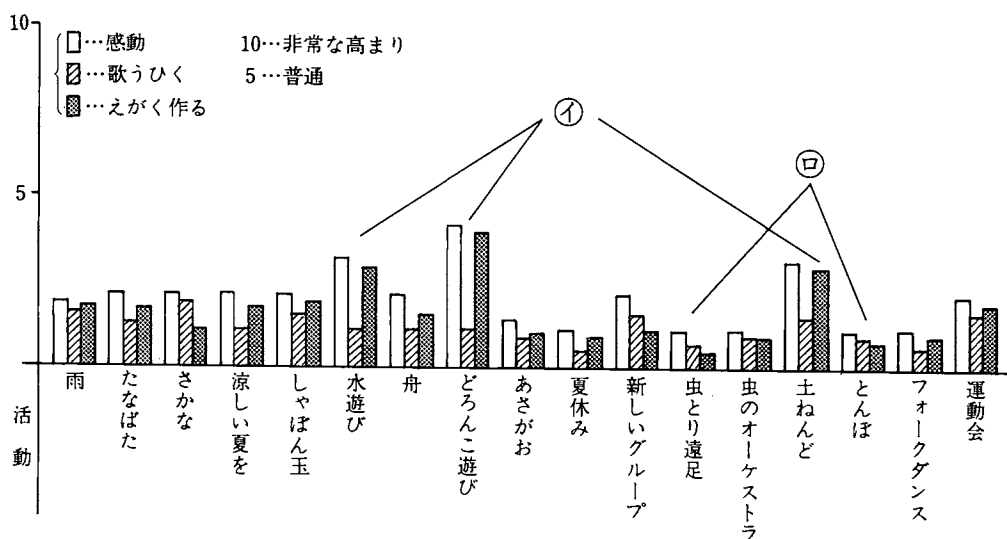
#### 英彦へのねがい

●とても活発で好奇心のかたまりのようにいろいろなことに目をむけ、「すごいなあ」「ええっ」などと感動も大きく、意欲的に活動にとり組む子どもでもある。男児であるせいかなどどちらかというと、歌うひくの表現よりもえがく作るの表現のほうが意欲的であるが、歌をうたうのも好きで、うたいながら体をよく動かし表現することもあり、表現のせかいを楽しんでいる感じを受ける。

●歓声をあげて感動を示したどんご遊びや、新しいグループとの活動ではあったが、①で示すように感動があったわりには、表現活動に移れなかった。それはどんご遊びでは遊具のとり合いとどろを使う場所のことで有孝や鉄平とけんかになったり、新しい仲よしの志都とお互にかますぎて口論したりしたために、けんかに気がとられ、遊びに意欲がなくなってしまったからである。英彦はいろいろなものに興味をもち、感動しおどろきそしてその気持ちをストレートに出す。しかしついつい自分本位になってしまいがちで、友達の気持ちを無視するのでトラブルが多く、せっかく自己課題をもって行動してもそのために、英彦の持っている表現力の半分も出せない時がある。とても残念なことだと思う。英彦の感動をさらに大きくし豊かな表現力を伸ばすために、英彦の社会性を育てる配慮が必要であると痛感した。そうすればさらに表現のせかいも広がると思う。

●②で示すように、感動やおどろきがいつも大きい英彦にとって、感動の少ない場合の活動を振りかえってみると、歌を歌ったり、えがく表現をしたりするタイミングがどの子どもに対してもあまりよくなかったように思う。この意味では、英彦は教師が表現のせかいの広がりを見たり、指導を反省する目やすとなる子どものひとりだと思う。

橋本 裕希



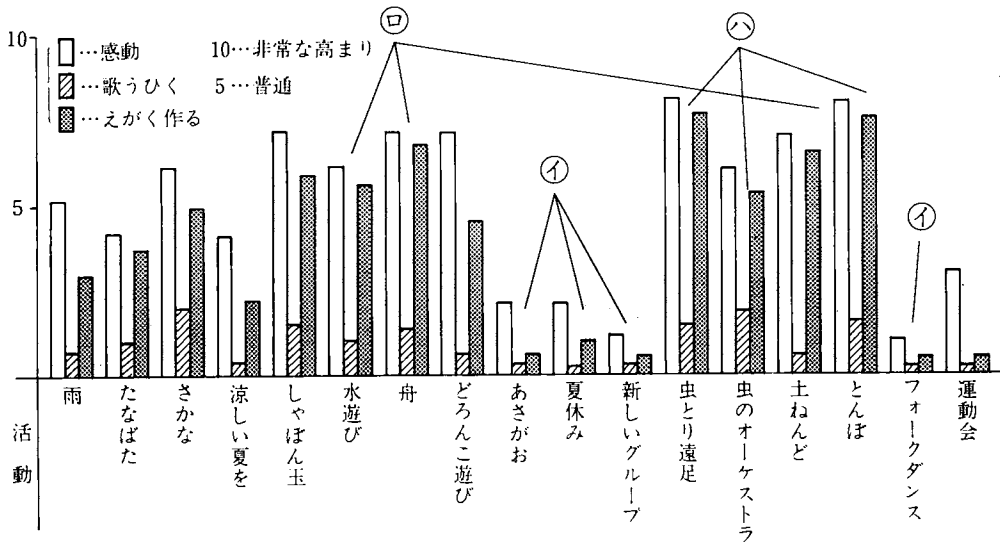
裕希へのねがい

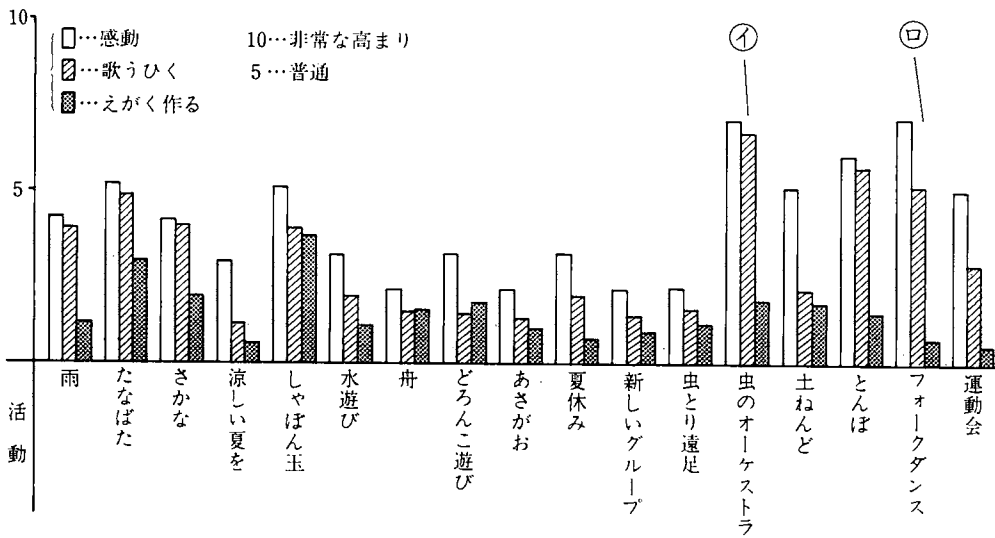
●今までに集団経験がなく一学期中は過緊張ぎみだったようだ。家庭連絡からは毎日園が楽しくて弟と幼稚園ごっこをよくしていると聞かれるが、園ではあまり喜怒哀楽を示さず感動の度合もわかりにくい。しかし裕希なりの心の動きは見られる。新しい経験ばかりで感動の連続であるはずなのだが、その感動が表情や言葉、行動に表わせないタイプの子どものなかであろう。

●ひとりで絵をかいいたり、ものを作ったりするのが好きで、㊦の場合のように、水遊び、どんご遊び、土ねんど遊びなどは、黙々とひとりで遊び込んでいる。そして、地面に水絵を描いたり、どんごを海に見たてて遊んだり、土ねんどを十分こねてお花にしたりした表現を楽しんだ。グラフでもわかるように子どもの大好きな自然に親しめる遊びでは、裕希のもった感動の大きさに近い分だけ、特にえがく作るの表現できたと思う。反面、ひいたり口ずさんだりといった表現はあまり見られなかったようだ。それはあまりいままで経験がなかったりしたせいではないだろうか。

●㊧の場合は、いつもの裕希とは逆に、歌を口ずさんだり、メロディオンでとんぼをひこうとしたりした。虫とり遠足の様子から察するに、生き物にはずい分抵抗がありそうだ。そのためにそれを作ってみたいとか、虫とりのかごづくりをして虫を捕えたいという気持ちにはなれず、歌うひく表現がえがく作るの表現より高まったと思われる。そのほうがイメージを抱き実現しやすかったのだろう。

●二学期のはじめ頃には裕希が感動した時の様子を捉えることが少しずつできてきたが、裕希のように、あまり感動を表面に示さず内に密めているような子どもの見つめ方のむずかしさを痛切に感じた。そしてまた、このようなタイプの子どものどのように指導して表現へ導くか思い悩むところが多い。

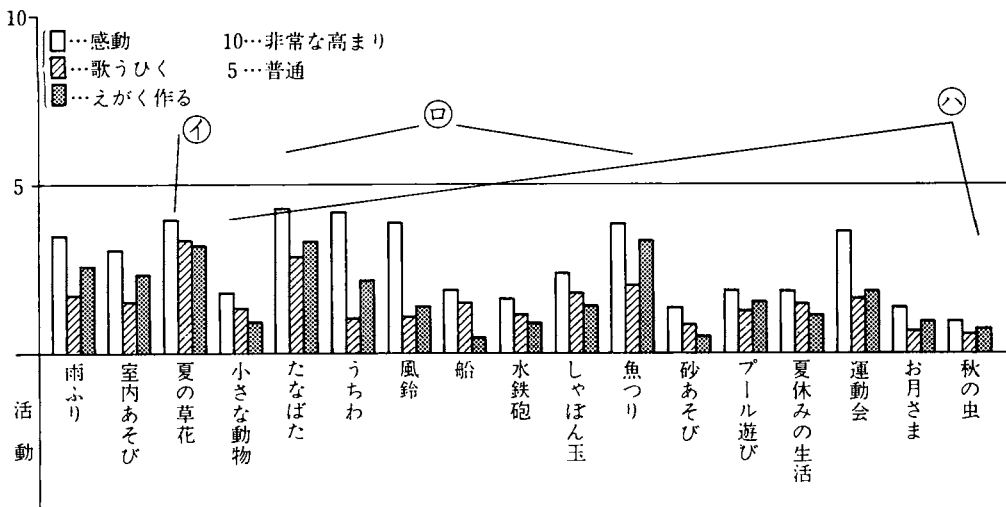




#### 恭子へのねがい

●恭子はとてもおとなしい性格で一目線の細いあまり目立たない子どもである。しかし、物の見方考え方がユニークというか、ちょっと他の幼児と感動の観点がずれていることもある。たとえば雨を見ていて、思いつくまま歌を口ずさんでいるかと思うと、みんなで雨の降る様子を話し合っている時牛を見てきた話をしだす。一目全くとんちんかんな話なのだが、恭子の頭の中では、ずっと前大雨の中牛を見てきたことが感動として残っていて雨の話題とつながっているのである。このような場合がえがく作るの面にも出てくる。その意味では幼児性が多分に残っているといつてよいと思う。感動したことがずっとストレートに表現されないで、ピントはずれの表現になる。しかし、それは教師のねがっているものからピントがはずれているだけで、恭子の場合のような感動を表現のつながりを認め、より伸ばしていくことも教師にとって大切なだろうと思う。

●リズム感にやや欠けるが、歌うひくの表現はとても意欲的である。体表現でもそのものになり切つてピアノに合わせようとしているし、歌を新しく作ったり、リズム表現などをよく伝えに來たりする。そして教師に認めてもらったうれしさからさらにいろいろ考えることを楽しんでいる様子である。今は恭子と教師の一对一の認め合いで満足している段階だが、恭子の良さをクラス全体にも認め広めていく方向へもっていくことが、より恭子の感動や表現を高めることになるだろう。①の場合、恭子の工夫した表現を友達が認めたのでさらに意欲的に活動にとり組んだ例である。②の場合、フォークダンスのダンスが固定されていたため、恭子のユニークなダンスが受け入れられず、せっかくの感動も十分表現へ移れなかった。子ども達で作り出していくフォークダンスを考えていくべきだったと反省する。また恭子がえがく、ひくの表現のせいかいにも感動をつなげていってほしいとねがっている。

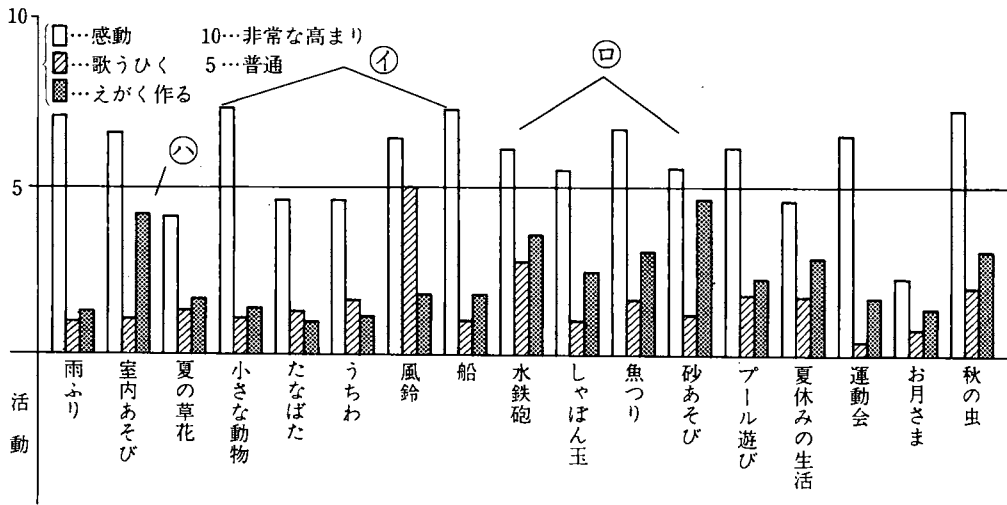


#### 友里へのねがい

●友里は喜怒哀楽を示すことがほとんどなく、感動の場もあまり見られない。しかし友里なりに心を動かしている様子は見られる。家庭では、結構ことばで表現するらしいが、園では黙って首を縦か横にふるだけで、お友だちの一步も二歩もあとからおくれてついてくるといった様子の子である。しかし園生活は楽しらしく、登園をいやがったことは一度もない。感動を身体や表情、ことば等で表わせないタイプの幼児と思われる。

●静かにひとりで絵をかいいたり、小さなものを作ったりすることを好み、①でみられるように、花をかいいたり、包装紙や牛乳のビニールなどで小さな花を作ったりして楽しんでいる。また、㊦でみられるように、たなばたの笹飾りを作ったり、魚つりあそびのための魚の絵を夢中でかいている様子がみられたが、うちわや風鈴など、創意工夫する面の多い製作活動では、意欲が少ないことがわかる。描画の伸びを製作の面でも生かすことができれば、もっと友里の心を開くことができ、感動も高まるのではないかと考えている。

●家庭環境から、小さな生き物や虫などに親しむことの少ない子どもなので、特にこれらの活動にはあまり感動を示さない。そのため家庭とも連絡して、かたつむりや青虫、バッタ等の小動物など飼育して世話をさせる等して関心をもたせ、いろいろなことばかけをして興味をもつようにしむけているが、あまり大きな効果はみられない。友里のように感動を表に出さず内に秘めている子どもをどのように伸ばしたらいいのか、また、友里のどこを見れば本当のよさがわかるかなど、教師は、子どもの育ち、変容のすべてを見落さないように努力することが大切だと思う。



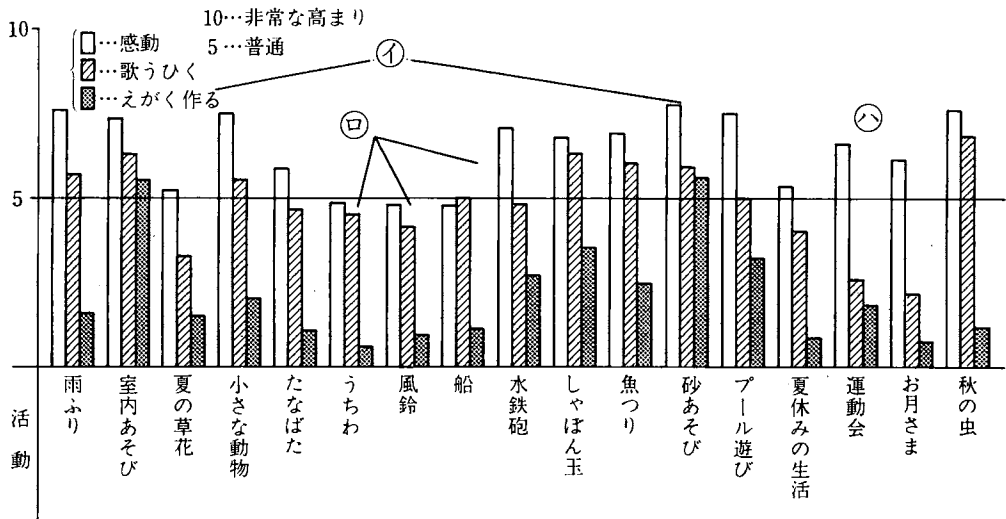
#### 正貴へのねがい

●正貴は子どもらしく、何事にもすぐ感動を示すが、その感動が長続きせず、すぐくあきっぽい性格である。年のはなれた兄とふたり兄弟の下で大変甘やかされておりまた12月生れということも重なって幼い面が多分に残っている。一つのことに集中して打ちこむことの少ない正貴に、感動の高まりをどのような形で表現させたらいいのか、教師にとって、大変頭の痛いことである。歌う・ひくの表現も少なく、歌ったり楽器を演奏したりすることも好まない。体表現も、ただ自由にとび廻ることは喜ぶが、こちらから決まったものを与えたり、自分で考えて表現することになると伸びが見られない。えがく・作るの表現でも、手先の不器用さに加えて、落ちつきのない点、根気のない点などのため作品が完成するまでには、たびたびの援助が必要である。①のように感動が大きい表現のせいかいは誠に乏しく正貴にあった表現のせいかいをいろいろとさぐってみる必要を痛感した。

●水鉄砲あそびでは、めずらしく容器もあれこれとちがったものを工夫してみたり、遊びながら水鉄砲の歌を口ずさんだり、リズム遊びに喜んで参加する様子がみられた。同じく砂あそびでも、全身泥まみれになって、トンネル作りや街作りに夢中になったり、いろいろな遊具を使って工夫する等、感動の高まりが次々と見られたように思う。何が正貴を夢中にさせたかをよく見きわめ、正貴の表現のせいかいのきりこみ口としたいと考える。

●認識のせいかいでは、兄の影響もあってかなり深い感動を示した正貴だが、②のようにこと草花に関する活動では感動も少なかったため、身近な話題から表現のせいかいを広げていった方がよいと思う。

西村 哲平



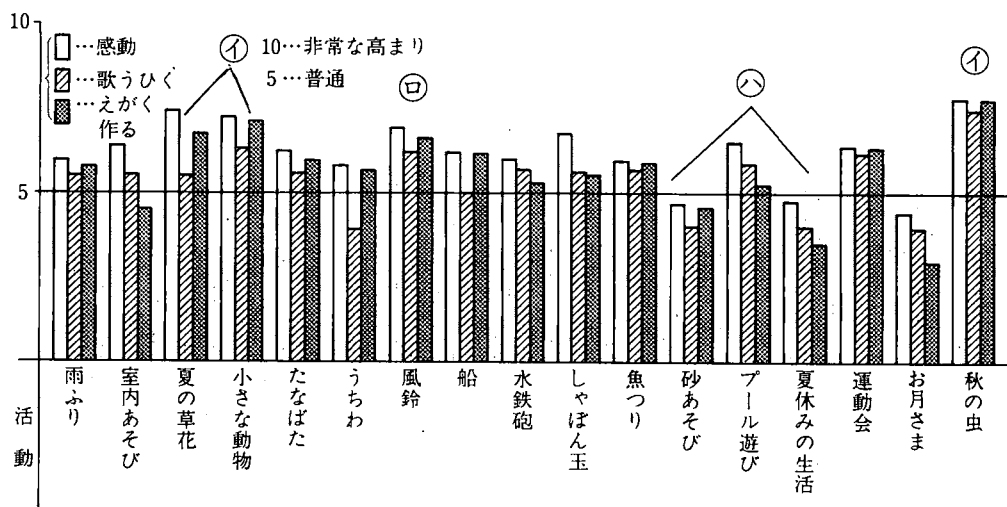
哲平へのねがい

●哲平は大変子どもらしい子で、ブロックや積み木などの遊びや砂あそびなど身体を動かして全身であそぶことには意欲的である。しかし、左ききで不器用なことからえがく、作るの表現は好まず、年少の時から、これらの活動になると思うようにできないためいらした態度が目立つことがあった。歌う・ひくの表現では、音楽を聞いて身体を自由に動かしたり、テレビ視聴中、いっしょにテーマソングを歌ったり、楽器を自由にひいたりすることには興味をもち、意欲的な様子をみせるが、ある程度の約束をしたり、決まったものをさせようとすると少々抵抗を見せることもあった。①に示すように感動があったわりには、歌う・ひくの表現が伸びなかったのは、そのせいと思われる。

●②のように、感動がいつも大きい哲平にとって、感動が小さかったのは、次の活動に製作があるという予想をみてとったせいと思われる。哲平の心のうちをみてとり、教師は導入の方法や、感動の与え方にも工夫がいると思われる。また、製作活動の場でも、小さな工夫も認め、励ますことばかけや援助が必要であると痛感した。

●哲平は落ちつきのない性格のため、細かく観察することは苦手である。そのため、小さな動物や秋の虫の表現活動では、感動も大きく、喜んで体表現したり歌ったりしていたわりに、えがく・作るの表現では、全然といっていいほど意欲を見せなかった。不器用さだけからとは考えられないので、落ちついて、じっくりと物事を見ることから指導していかなければならないと考えている。





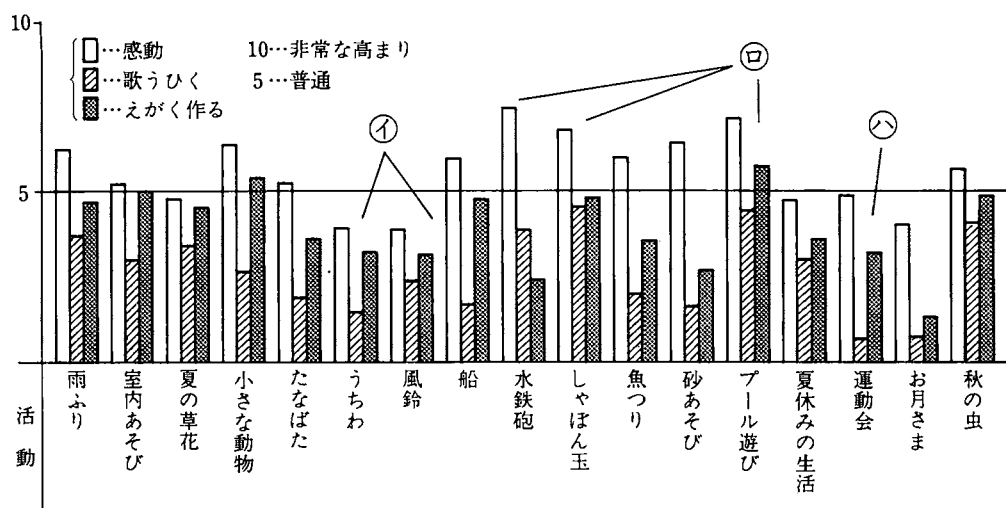
### 珠理へのねがい

●珠理は、大変明るい性格で、小さなことにもすごく感動を示し「どうして」「どうなるの」などと疑問をもったり、「やってみたい」「もっとしたい」など意欲的にとりくむ好ましい子どもである。テレビを視ていても喜怒哀楽を素直にあらわし、教師や友だちにすぐ伝える。教師も珠理の感動を受けとめ、一緒に感動したり認めてあげることで、さらに「もっとやってみよう」「きっとこうなるよ」などの次の感動へと高まる場を何度もみることができた。

●特にえがいたり作ったりが大好きで、自由な遊びの中でも意欲的に表現をする。小さな生き物や草花などの観察物にも興味をもち、よく観たり表現したりする。創意工夫の面でもすぐれており、他の子ども達が「わあ、珠理ちゃんすごい！」と思わず声をあげることも何度もあった。特に、ざりがにの製作や描画の面で細かい観察をしており、教師や友だちから認めてもらった喜びから、さらにいろいろ考え、工夫する面が見られた。①の感動の高さにははっきりと見ることができる。

●歌うことも大好きで、知らず知らずにメロディを口ずさんでいるといった様子である。草花の美しさに感動して一節を口ずさんだり、バッタやちょうの動きに感動して、ことばにメロディをつけて歌ったので、教師が、ピアノでひいたり、カスタネットやタンブリン等で拍子をとっていっしょに楽しんだことで、より感動を高めることになったと思う。しかし、家庭では、下のふたりの子に手をとられ、十分な経験のできなかった夏休み中のことや、砂あそびなどには、感動が低く、教師は、どのような手だてで、これらのことにも感動をもたせるかが今後の課題といえそうだ。

## 別宮 慶



### 慶へのねがい

●慶は我が道を行くといったタイプで、好きなことには意欲的に取り組むが、嫌いなことにはそっぽを向いてしまうことがよくある。歌う、ひくの表現は、どちらかというとあまり好きでなく、特に①で見られるように、運動会でのリズム表現のように、ある程度の規制のあるものには興味を示さず、②の水鉄砲遊びや、プール遊び等の水遊びには、強い感動を示していた。また、しゃぼん玉遊びでも、ストローの太さを変えたり、石けん液の濃度等にも興味を示し、いろいろ工夫し、それを認めたり、ほめたりしてもらった喜びから、空をとぶしゃぼん玉をみて即興的に歌ったり、友だちの歌に耳をかたむけ、絵で表現する等、表現のせかいも、いままでになく伸びていたように思う。やはり教師から認められたり、励まされたりすることが、より子どもの表現のせかいを伸ばすのに役立つことがうかがえる。

●えがく、作るの表現でも、特にえがくことを好み、ダイナミックな表現をする。大らかな性格から、伸び伸びと大きな表現をしたり、誰の模倣でもなく、慶自身の持ち味を十分に出しきった表現がよくみられた。しかし、①のように感動も小さく、細かい作業の多い活動では、表現のせかいでの伸びはあまりみられなかった。慶の持ち味を生かした表現のせかいを認め、ユニークなものを求めた方がよかったのではないかと反省している。

●誰でもそうであると思うが特に慶の性格上、運動会等のように規制の多い活動は不快感をもたせることが多いので、解放感を十分に味わせた上で課題にむかって取り組むことができるように働きかけていきたいと考えている。